

甚蔵兵衛と胡麻の蠅はい

甚蔵兵衛ぶんざうべんえいは、梅田村の高村生まれで大男であった。身長七尺、それに大飯くらいで、一食五升を喰べたと言われた人だった。いまでも飯碗めしわんが大事に保存されている。足の早いことでも知られていた。足の早いことでは反物一反の長さは二丈八尺、二反分、五丈六尺の長い布も走ると、土につかないといわれるスピードの持主だったそうなの。

その当時でも、甚蔵兵衛ぶんざうべんえいほどの人はいなかった。変わった人には間違いない、その甚蔵兵衛ぶんざうべんえいが胡麻のはいを喰くわせた話である。

奥洲街道に「胡麻のはい」という商売人がいて、柳行季を旅人にたのんでは、荷物のご縁をつけて金をおどし取るといふ悪い奴、その胡麻の蠅はいは、足の早いこと普通の人の三倍くらいのスピードで走るそうだ。

旅人に荷物と宿を指定して、そこで荷物を受けとるからといって頼み、そこで旅人から受けとっては、大事な書付だったとか、大金だったとかいって旅人を「ゆす」ってい

た。甚蔵兵衛はお江戸で用達を終えて岩代に帰る途中蓮田の宿で胡麻のはいに出会った。

「旅人さん どちらまでゆくんかい」と、胡麻の蠅が声をかけた。「岩代まで帰えんだて」と、甚蔵兵衛ぶんざうべんえいがいった。

「すんません宇都宮宿に届けてください、大事な番付がはいつてんだけんども、お礼は充分にしっぞい」胡麻のはいがいった。人のいい甚蔵兵衛ぶんざうべんえいは二つ返事で引受け、荷物を肩にかけて岩代へと帰り道を急いだ。

古河の宿についた甚蔵兵衛ぶんざうべんえいはびっくりした。茶屋には、荷物をあずけた人がいるではないか、俺も足には自信があるんだが、彼も速いなあとひとり感心していた。

そして次の小山の宿で泊ることにした。日が暮れたので越後屋に厄介になった。

やがて女中がきて「お客さん、風呂先にしっかい、ご飯にしっかい」といったので甚蔵兵衛ぶんざうべんえいは、風呂を先にと風呂場にいったまた驚いた。

荷物をあずけた人がはな唄で風呂に入っているではないか。

甚蔵兵衛ぶんざうべんえいは考えた「ははあ」話にはきいていたが、これ